

中国企業と展開する自社ブランド品

インタビュー vol.13

株式会社旭鍍金工業所 代表取締役 小林 晃さん



小林 社長

今期から当研究会の幹事に加わった小林晃さんの会社、株式会社旭鍍金（めっき）工業所を訪問しました。3代続くめっき工場の現状、そして中国との関わりを聞きました。

■ めっき工場3代記

旭鍍金さんは八尾市で操業される老舗のめっき工場で、パート・アルバイト含む従業員は総勢80名規模。そのうちベトナム人が30名、中国人が15名（うち技能実習生6名）と、日本人の若者が敬遠しがちな業種の現実を表しています。従業員数が15名以下の会社が85%を占めるめっき業界において、比較的大きな従業員規模を誇ります。

同社が手掛けるのは、鉄や銅に施すニッケルクロームめっきを主体に、ABS樹脂への樹脂メッキ、ステンレスへの抗菌めっき、アルミアルマイト、電着塗装（カチオン、カラー）と多岐にわたり、特定のめっきに専門化する傾向にある業界において、数少ない「多様な加工を手掛ける」工場です。

小林さんの祖父が1947年に創業され、1954年に法人化。1975年頃にお父様が2代目として後を継ぎ、お母様と二人三脚でがむしゃらに働きます。納期や数量、品質レベルに無責任になりがちな二次下請け的なめっき業にもかかわらず、特に納期対応に全力を尽くす旭鍍金さんの営業はお客様からの信頼を得ていきます。特にお母様は「取れる仕事は24時間操業してでも取る!」的な、正にスーパーお母様。営業から経理、現場作業まで昼夜を問わず身を粉にして働いておられました。このお母様の業務に対する姿勢（特に納期対応力）が同社の強みとなります。そして2010年に晃さんが代表取締役に就任。奥様も経理の仕事に就いて世代交代が始まります。

■ 生まれながらの3代目

小林さんは1970年生まれの46歳。中学・高校とバスケットに勤しむスポーツマン。長男であり、子どものころから「家業を継ぐもの」と考えていました。学卒後は主なお取引先である厨房ガス器具等を手掛ける「ハーマン」で修業の後、旭鍍金さんへ入社。当時は社員数15名の典型的な町の「めっき屋さん」。付加価値の小さいクロームメッキだけでは価格競争にさらされて生き残れないと、前述のさまざまな加工に取

り組みます。小林さん自身、「やろうと思ったらやらないと気が済まない」性格ゆえ、書物やネットを駆使し、営業、技術・知見の蓄積に邁進します。お客様の厳しい要求に応じていくうちに品質が鍛えられ、難易度の高い仕事に製品メーカーさんと共に取り

組む過程で「相談できるめっき屋」に成長していきます。その成果が総勢80名の社員と多様な加工に応える今の旭鍍金です。



■ 中国との関わり

2005年頃、協力関係にある製品メーカーさんからの依頼で、中国のめっき工場へ「工程の条件だし」へ赴きます。それがきっかけとなり「中国で仕事をしたい」と思うようになります。技能実習生の斡旋業者とのコネクションを通じて知り合った中国人と会社を設立。その名もNCC株式会社（NIHON CONNECT CHINAの意）。特に当てがあるわけでもありませんでしたが、思い先行で会社を設立。ネットを駆使して仕入先と販売先を開拓していきました。ここでも「やろうと思ったらやらないと気が済まない」性格がモノをいいます。当初は単に仕入れて売るだけでしたが、のちに半製品を輸入して自社の抗菌めっき技術を施してメイド・イン・ジャパンの自社ブランド品として「コーナン」等で販売するまでにいたります。

「商売としてはまだまだ」といつもの控えめな調子で語られる小林さん。しかし、町のめっき屋さんで終わろうとしない熱い一面を見た取材でした。

（まとめ：株式会社電研社 野村明弘）